

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color Black

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

恋香
繡史

龍
月
夜
物語

二

新
五
冊
口
七
番

遠心
1850
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

遠 13
1850
2

明徳元年

わりあは
き丹丸

臘月夜戀香繡史卷之二

○餅搗

浪華

柳浪陳人

著述

金鳥飛玉兎まり。灰屋昭久がこの蝶之助。やうも十七年よとあり
 小く天授て世よとくれり標致よしその性まこと伶俐豪富の家に
 生るるといへども、流むらうも、臨るる海ふく。朝夕父多媽よ奉へて孝
 盡とや成長よつと。物なきを勤いさうたう。清般の義よとことく、
 て乱糸よ湛能なるが。靴中小鼓ハ類なき名ふたりとや。さてこの
 灰屋の家ハ播磨の赤松殿よりさうの扶持お下され代々兵服所を
 勤めける。こまにうりて家主たるもの年の晩ごとくに播磨よとてり。屋敷
 新禧の縁祝とよせる常例なり。今や文明十一年臘月もすむるさきぬ
 まで、どうとこの支度とぞかゝたる。然る小當主孫市偶ハ感胃の念

ありしがや重くて頃よ夾きかておぼゆるまぞかくてハ期ものひかんと
隠居昭久とも商量のうへ兄弟蝶之助が巴が名代とて播州へさして
市孔を洗とめいひまよよりて蝶之助の忙しく旅装と愁へ管家茂春
と介係し一駟一擡の礼物を宰領とせ僕久三の良方に従へて同十九日
の拂曉に都門をたち出立歩取歌ゆきして日あらず播磨置塩の府下
小いり。清水埒なる浄福寺門前の細干屋勘吉といへる宿をまじ直那
里よ落着か合が右やうて市令まで来たるはしな屋をじひ折當屋形赤松
總州別駕政則朝臣とやい室町家より山陽道の探題よ捕せしむ相伴虎の
列よ班なり播磨備前美作の三州の太守とておぼよそ百萬石餘の牧伯あり
部下よ六十數ヶ所の子城ありて長臣の輩かゝるごとくこと留後と勤むこの
置塩ハその幸城にして政則朝臣の在を所あり今の姫路よりいじと東小

ふのころ。も柄山廣嶺ふどの麓辺なり。もとよりこの國ハ土壤肥腴
と且海沿はしらまへ奥陸の便利よく後穀倉よ丸絹布店よ堆く
ところ京浪速よあるまじれ都會なり夫西雄ハ並えんとなん
當家の一老宇幾田和泉守と呼はるものハ秩禄七万八千石の領
備前長船の城をまづり。歴代武功の岡曹なり。當年洛北舟岡山の合
戦よハ類も軍忠を抽んで少く奪くも室町殿の市感状と賜り
威勢赫々として専ら當家の權柄を執り同列島村彈正ハ
六万二千石知行して宇幾田と共に國政を掌り仁智のこころ
世よ高く屋形も學問も先恒よ直諫をばし民と牧むるハ恩と重
刑と輕くハ藩士の過失ありて坐黜かるものハ陰日向ありらこと
とよはしくハ窮民の年税よはまりせんとならぬものハ密りよ已が倉が

蘇山文藝全集 卷之十一



鯛魚の日
街の助け
て宇幾田の
ヤシ之
あつた



發きて賞與隨意返米ふはしむそのとまハ八合盤とてら収めとバ
三州の黎庶どもその仁惠か抱く懐き服をたて死も嬰兒の母と慕ふ
おとしおしおかく彈正の臣賢人王莽が奉勅せるとバ朴直なる
和泉守ぶうくくると公悪くくると睦はから日と小茅の應接も
嘆のうらふはまらせど互の胸はみぬかきせりふとふ人後末一個の大元と
惹出とべき濫觴たるうとてとれたこの月の廿三日ハ宇幾田の邸の餘
掃たるこの家の仕奉りも奥女侍どものこととくれ新に嫁娶せるとれ
あつ今まうまとい面生した附翼のともたど偶まう合とめれば仕女
考その人のよとらまらうて擗とゆと白の上と裁とめりひてたのし
みる習俗をうとらふ今年いままとこの人の心をとりねばむとけ
月ひふものとおとぬたりいせしが先月より當邸に奉公よ出るに花濃
といへる侍女あり生を得て沉魚落雁の容閑月羞花の粧ありか
もが父飯屋頼母ハ太守の侍衛の騎士かうういつのうとあや宇
幾田殿の典力に属らとぬまうつのとがすこの花濃が母親ハ泉州の
内室清見の方の乳媪の子とも名ハ竹川といふ竹川まう清見の方
令愛千種姐の乳母とてうりたとバ二代の乳兄才といひいれうとふは
けて夫人清見の前ハうとらうぬおがし物の侍女の中よりかこ
春願冠遇まるとし涯しとれゆへ傍掌の仕女をうつとられと妬
且花濃が花般の淑女なるを忌猜と時く集りふとた傍侍この縁
搦ハかの厭ひおぬ白と載せおりのとまに騁とさいおとちこの志ハ
洩してんと動ともまばりしのこひとめたあうとふの事いつた傍が
耳よりうこははうやうとやと深うとまひふまづと不どと羞殺ぬ

だきちもひぬほしらのころまでいふまでとてやと。まご里ふれ
ぬ。雪のふく啼してぞらじらる。兎角までくやその田よりあるけき
死濃いまでお原をふ記出ていつら縣清びらんその教とどはるもの
か。仕女もとてやとららばおひる人七人おしして彼所はふを搜
索する。おれいさてとて。灰屋蝶々助ハ夥の礼物を據せて前門より入る。
中のコより素内などよ。謁者の侍出應ゆをバ蝶々助ハ進物を並べて
礼懸く口状と演侍そのま。礼物の裏面は運をせ、やわらつて出ま。
蝶々助は向ひ申出の慈き家長どもへ申達せり。今日ハ王公父子とも
登城の通守ふま。帰宅の上披きいたさんさておと先格のところ夫人
引見やとららあつて。先那里へとらまよ。傍路へといつて。蝶々助ハ謁
者ハ教導ふまらせ。まづ板るぬとだゆとやうて茶厨より通る

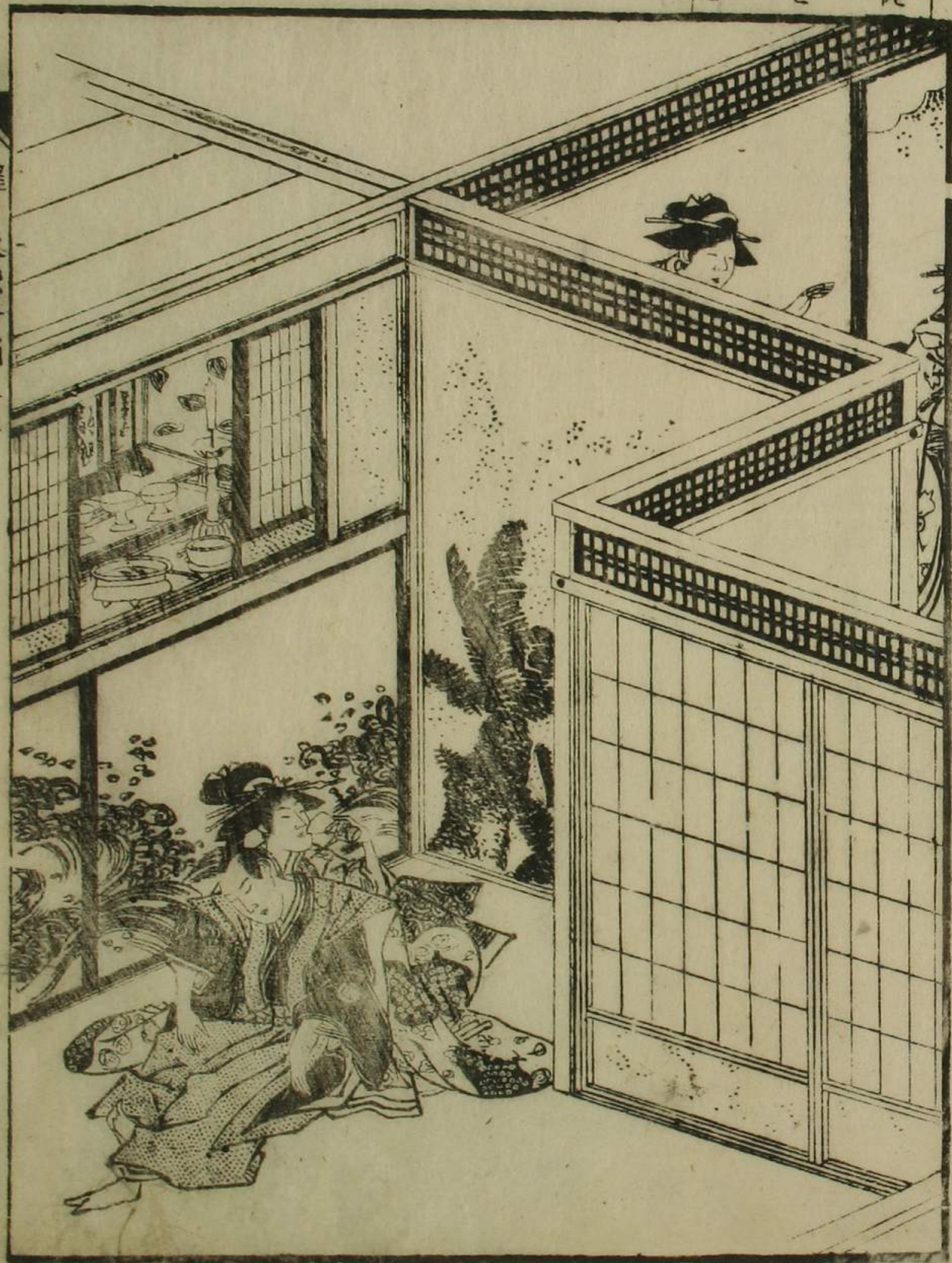
ころり未堅よかこや。この茶の間ハ局吉岡中老早瀬等ハ語
所なり。い時土岡をやくとららしてせ寒温ぬの。和主ハ灰屋の子息とや
かくとけりて寒空ともいこと。長の行程ハ大儀なり。乃翁令兄
かうりふまや。早瀬もやと會おして。わら子瀬と中も例のどく
早春までの通田ありかん。邸へもまらまいらまよ。傷なから入屋か
いと町噂もや。蝶々助不どし。安堵て小的とい佐野蝶々助兄孫
市病氣つと名代にして今夜申屋形様ハ所礼の爲とら。ゆ。この方
さぬハ親代ハ指あ申慈なま。感佩ぞ介たてまつ。弱冠と中よろづ
百不舎の小的よろ。内周旋のわどぬいまいとぞのべふら。かくて両老女共
のかからうら。一座にの。とある仕女も。熟蝶々助が打扮とらる。小袖ハ國
主より拜賜せし。屋形様の申後つと。時服なり。兼七子の間寛と表

弁套の塩漬の厚絹も加賀條の烏羽玉なるが後ハ袴扇の中ハ貞の
記載より好むといふ高尙なええて黄茶や小黒茶丸の裏よりなる
袴羽つけ傍よなる細流々の脇差の七所持ちのやまゝふむに夜裳の
立流といひ角前髪は倍止ていといと温柔なあま人の愛致をふくも
白の今時雪よりし白く眉清く目秀てんむゆさまごふうつし
加梅起居の風韻ふるまごあまのほよからびしてまろりト卑す初
まくりんゆもど信より物なれらるふぞどのく我をおて半晌眷恋
居る。

持佛堂

やまて帳内よりあつせあるふぞ早瀬ハ襟と助を傍ひまきてえの
ゆく檻の間の所へあけ放ちる曲廊なる階除の外面へさる寒げよ

氣をたちて雪片必多散まごも積りもやらず柳ハまご記眉ご
とらだ梅の魁花のも芥くしてま袖よこひるはうなり夫人の市産ち
かくえゆれをまご扇子の枝とりとまご二回二回経て屏風の陰より膝
行恭くまご両手ぬはき額と席よけらまご早瀬ハ声く糸都長服所
代灰屋襟と助と稟あま夫人清見殿くるふ市法いははりて都
もまご事とらえでたんと作と襟と助まごおそれ入りて頂ごも
得あげごそのやと退膝歩してみ出ぬまご舊のおと幾回もふく越出るに
とある對屋の廊口より早瀬ハ襟と助ぬまごはとまご那里ハ清ひゆに
しめまご今日幸まご祝ひ日まごはらまご九款まご勸まご夫人の作まご
しつらまご記もまご純子からけ拿まごぬ襟と助ハ早瀬ハはしたまご
らけぬいご記なるまごひひけらまご後地月のかまごまご影し



持仏堂に
花燈
燈助と
普伝
と

影の女伴
燈助と
懸少たて
白の上
載んと
さく所



物音とるゆへに何事の起らんかと。突一撃せしとらるる。八九人の仕
女はしるしより書ふ。慥く助と寅と押のげづちへおゆくやらん
ざりたあひていとかがは。眞厨基ハ唯今解橋完し所とこのとき
夥の仕女とわかさる。慥く助を堂よけ千秋樂萬葉樂ふんと。雜
ほいどまゝとらる。板圓の上へ流つ揚つとるふど。慥く助いゆめおとひ
まうけてひる不さよせおひ。忽地肝にまて人らちもふく魂いたる天
かけり。されど餘外國のふれも行儀づります。中老早頼小従ふ
どうまゝとらる。この時と見て大よ心を狂ひあざれる仕女等。碯と睨し
多勵し。この鄙陋と振舞ふ。家凡も會ひ生人かど。やそれ振舞ふ
せと疾靜まき。やく那里へはまゝとらる。息もたあゝく罵らる。仕女等
もこの時をたえてなほ。慌忙奉りまうて。慥く助がさづりひいり

騫地は内房なにして探ゆき。いづかあまのふ嚴ま叱らまて。途まどひ
やまらる。人々家廟の邊までやうる。跟返せんとなやうらうら。い
らん。慥く助ウエト一声昏暈。まゝ仕女等ハ興がは。面をまて土の
こゝろ。ふもせんをべかり。こゝろ。いせん。あゝ。笑止や。こゝろ。いせん。いせん。
ごらう。そのまゝ。死者なうら。控て四分又五分。逃ちらる。縁をま。對
面相識らる。縁あま。千里も乃相遇といふ。花濃ハ今のあゝん
孩き。持佛堂の紙門細目おけ。は半面。てあれを憐れむ。ひし。一個
の美少年。面変て息絶居らる。花濃ハ登職慌忙と。佛前の茶湯と
拿まら。いちやく。少年の面にうらうら。死。吾人の境を僥倖と。残人の
茶水を合し。あえど。はらう。に。漣き入る。ま。這一滴の冷み。胸底ふ
徹て。慥く助。心死息吹えし。や。さら。人々。地へ。と。眼と。か。死。瞳

瓜さざりて孰復をばり 衰衆とふ不しくて。羞澁る面とちへ花も優
 月もも劣るまどく。芳齡ハ破瓜春さけて。横顔俺より袖ハ濃紫地
 の百花採大幅ふる金綱の帯後さまにむとひ。祇瑠の檢頭光珠さ
 くから斜ふさせる替瑠ハ黄金百銀ちりむりつに濃もまご嫁く助
 玉りく流の麴うかるが白さにとえていこも務けく。大液の芙蓉子も結る
 だき後俏なればたご媿娜と愛まとい互よんをどれせけど今さらいと
 岩躑躅盤子の山の岩同せく。夕の曉きぬらうらうらみ口流ら人も
 山扼子の花いろらうらもふいで。まごうらまうねおまといとらへすご二語
 瓜欠さぬおまつら。まごやあつらよ人着をれで不覚の涙堰あえす。
 こころほくもたちらうら水又回又えく。斜秋波ハ角行瓜をさうせ
 おとくならん。

○糸字

卷残せる曆の鴛白くええてより。げくハ汪連鰲かんとすうつ春俗
 支度よのそとへそがけは日ハ宇我田和泉守の誕辰ならん。斗忘この
 會とわのえりて一門の人々ハさらけり。親さかきり瓜招さるや水陸ハ
 珍味お盡し。吹彈歌舞お設けらきて。種く小款待たやみ考まご
 だう。満堂一赤雨は點し。羅ねるれば燈燭の光り輝耀て宛も白
 昼のふとくあり。かくて敬つ酬つ酒酬して。盃盤狼藉さうけられた
 登龍の色のども許されて一ツ迄は集合る。この邸の小官人刑部
 女浦より免。磁支波涙進みんと。端番仕舞をばして。良瓜流つ
 家主和泉守様と助とちのげけ。汝ハ礼舞ハ流流からよ。一番
 舞て見せぬとらう。瓜の標と助ハふくく羞澁百般辞し。も。屋客

ふもろく免たてらきて今ハ遊る語さあわぬ。やむとんぬぬど時より
あ入りてとれたしの邯鄲う八幡なんど舞ふさめて首尾せり。このと死ハ
純子の帳裏あげて夫人さへ透見なりたまふ那美人の死濃なるもの
清見殿の腰下侍居まば扇子揮て舞らうも渠が空幼寤たふ
粧態の眸ふちうつたそろほくら虚心なつたかかきと幼より
記得くらこゝんて造化と馬脚ハ露さへやぐてまゝ大觥ふと行
きくららど襟と助しと酒量はるる極て私ハ笑えんて公忍れ
事又托けて瞬息那里公遊と出そのまう墓子の間より茶道
宗拙は清て一碗の淡若公嚙くめ浩下酔ふれらる名殿原這
里尋尋来りも右右うちたちわら。強は襟と助公ひつたてなごて
本からせしぞ杜康が否ある許せんせい今うとらさくも

せせめらま襟と助とくあごもて種くふふと争とくづらとこと
青くは清の後後びとれとれとれ辞料よといと列位との汗意
公肯くをたさう先この後公優つてととしかる貴命よまていれ
ととごぬわうごはいくろみだんる其情公避し裏頭の仕女局のま
てつんまバ交代て休息るふや紅公纏ひ雲公穿ていとう嫩こら衆
ども座居らう那死濃もその中ハ在らうらう那持佛堂の事ハあつた
かほよらうは老實は居らう女江は對ひ列姐もくらくと挨拶公ふ
せば大家口くふあいつの公襟と助とのくくらる自つてとて小的目
今誤まつて清の裾公後びつたふとすふておひつじぶらる後つごこ
たびてんやといひはまが針妙の雪公ゆらとやくとくみ出さハ空日公頼
かまらうば後ほけてまいらせんどく脱がせた人といふまど襟と助こハ



花源系定
 七匠くこ
 味も助に
 まい
 主情と
 ありふら



感激かしくうらこびいらこのまきたらて 袴たぬ雪山峯がまへうと死
 網草煙しはく羞炭をかかせる雪降は袴の袴破をあらうる未だ糸
 と針よこぬいままと縫もてるるころは廳上のかこふ岡とらうへく
 執刀とらうらきだちる乙女の翠兒と喚做ともの唐突と奔来法娘
 られら今大腕版が猿聲の狂言のまうふたじく後瓜捧はうつとやく
 本せ紀とすひ袖とおうりれとらうらうせは物見うたは婦人の癖ある
 かざつの子改とゆきれといいていもいんとはくしゆらぬは花濃と時助
 四目一友よんあせせて互よとらと蓋面つひ兎再とらう目の佛がとら
 まてぬらひ機舎と死濃いあまの娘よふんばをば康は撞きぶくたが
 突くと跳てやます蝶々助も花濃が油よりするら留奇捕のまうとら
 急あしでうららひ初る淡雪の肌肉も腐るころなるのやうらうこの

花濃は三日持佛堂にて茶湯のあの縁むとび法びうのうはまかたに
 この日以とそその付のと幼くえて人まうとせしとかりひ不そり連もふいぬ
 恋さらば寧これて死まほし中く小亡魂ともなるまば怪人の氣身に綱
 纏らふかまやらしかどいたはらよ慕ひていべき泊瀬の山よ在をかば
 井小へのう神よ預きを願が待し妹脊山未ハ聖とかま海となつれ
 ち擔不そき女をの口まて出て来る語ぬのとまわの笑歌は右聞との
 一室隔し壁は身茶の間よんぬららぬ抱ぬたえらるかもしせしひとて
 えがこれ優里と死のたものいづこ小僥倖と。前は雪峯がとてはいとら。
 その縁糸なとらうらういせの角文字ふとつ又字の意のよ別法繩の昔
 瓜志のぶ字のかとらうらうふ久てけらりしと蝶と助はりしとえまは「あこ
 法び一糸のう文字とやくもその謎の意なとら。原来我を糸一とわと

つゝまの侍女一句よあつ世に改徳語かるよ人の境はて再び逢ふは
からまねげも「刻千金ふまいて人守の新獲さうが我も千金一
語よちあらる極意のふどぬらるさんとやうその糸がどれたう」ぬと
結びてえせをわびた濃もやうこれぬ猜しそろ花さめけひまで
まゝその糸の末とほとほとまゝ百子の命だに君ゆへやう惜からうと
のとの字のさまにむとぶ結びあふる縁の綱糸も一のちれ映とと
まゝぬいさごとが弱気あり。膝し助い竹ありひらん懐より一個の香包紙より
出し眼ざくりひふとあいつせて。花濃よみ師ととりしとあまそつと
狂玄の有難さふまゝいゝまにありてえてありしが。花濃があゝぬふと
氣がほとごいぬはしと執妬の角を生してかけとどろ。心地よりには
ともきさす。花濃がひつとて入るふ。

○唄のつた

かくて内房よ、夫人清見の前侍女花濃よ作せて。四季源氏雲の曲とよ
ものな藤橋檢校ととも。まゝとてさせてや。たりふとみおかしらぬとて
調子よころほく琴あやうたふふやど小むあるいぢくらるい低くこび
ふい息よこびは深く。只一個とて弾むとてさつとつらる。句とめふハ天津
乙女も舞上あまがうてふハ吟の様もうのも東渡。曲罷て後夫人と
孫て花濃がむされ涙とらうらうらむかほけと死る。膝懸死しつハ新蔵が
ハ女獨吟とて調よとらうらむ。花濃は後せぬ思ぬまど。桐人よハ甲
はしつと母よとらうか。いしく躊躇も。主命様むうとなく。そのまゝ衣裳と
あゝとめ。今宵えとと靚粧とらうらとやうふ望にはとぬもとらう。媿娜とら
兼姫もねびまさらう。嬌態あらうらもかやくばくまなう。かく後世の國

丁頭花
の
花
の
花
の
花



藤田の
花
の
花
の
花

見
の
前
の
花
の
花
の
花



十三

多岐能^{たぎの}能^のももとの中山^{やまなか}弦^{しづな}かき抱^{かか}きて奏^{あそ}ぶるのどし^{どし}彈^ひく^は振^ふ音^ねの玉^{たま}は
 夏^{なつ}かとおやまを唄^{うた}入^い骨^{こつ}舌^{した}の蓮^{れん}葉^はころぶあうらうの^うて^て死^しに^に懐^なか
 三^{さん}弦^{しづな}ひさぶら山^{やま}まを人^{ひと}の空^{そら}た^た偷^{ちゆう}眼^{がん}かよひせ^せけ^けかの意^い中^{ちゆう}今^{いま}
 い^いされて^てう^うかろ^ろ氣^きの^の二^に上^{じやう}り^りやち^ちぢ^ぢ情^{じやう}、^の骨^{こつ}子^し、^の縁^{えん}、^のゆ^ゆる^るの^の物^{もの}の
 罰^{ばつ}あ^あら^らも^もま^まの^の度^たの^の行^{ぎやう}を^を思^{おも}ひ^ひど^どう^うな^なると^とも^も盟^{めい}か^かど^どた^たが^がや^やさん
 い^いと^とか^かあ^あの^の系^{けい}字^じも^もて^て一^{いつ}の^のと^と契^{けい}を^をど^どれ^れづ^づと^とも^もい^いち^ちづ^づま^まで^で海^{かい}老^{らう}尾^び
 ね^ねと^とひ^ひを^をう^うつ^つに^にる^る條^{じょう}も^もか^かの^の漢^{わん}朝^{てう}の^の司^し馬^ま相^{しやう}如^{じゆ}卓^{たつ}女^{にょ}瓜^か挑^{てう}む^むを^をし^しび^びて
 ま^まも^も二^に女^{にょ}の^の想^{しやう}夫^ふ憐^{れん}小^{せう}督^{とく}が^が伴^{ばん}も^もあ^あは^はま^まさ^され^れい^いろ^ろ香^{かう}の^の慕^ぼ入^い條^{じょう}息^{そく}死^しお^おし
 返^{かへ}一^{いつ}つ^つう^うま^まぞ^ぞ人^{ひと}感^{かん}た^たえ^える^るが^が中^{ちゆう}か^かい^いと^とう^う除^{じゆ}く^く助^{すけ}た^たが^が恍^{わう}惚^{ぼつ}と^と神^{しん}傷^{かう}
 骨^{こつ}髓^{ずい}を^を徹^{てつ}圓^{えん}居^いる^る、
 因^{いん}よ^よつ^つの^の花^{はな}濃^{のう}が^が母^ぼ竹^{ちやく}川^{せん}な^なる^るもの^{もの}縁^{えん}め^めり^りて^て飯^{いん}尾^び頼^{たの}母^ぼが^が妻^{つま}と^とり

い^いく^くど^ど年^{ねん}と^と徑^{けい}しか^かども^も、^の一^{いつ}男^{なん}半^{はん}女^{にょ}と^とど^どの^の設^{せつ}け^けは^はら^らる^るま^まで^で又^{また}婦^ふは
 ふ^ふろ^ろく^くは^は愁^{しゆう}ひ^ひ、^の一^{いつ}年^{ねん}も^もろ^ろく^く、^の書^{しよ}寫^わの^の山^{さん}花^{はな}と^とは^は、^の三^{さん}七^{しち}夕^{しやく}の^のあ^あら^ら
 丹^{たん}敷^{しき}を^を凝^{ねい}して^て、^の大^{たい}悲^ひ尊^{そん}を^を禱^{たう}す^す、^の後^ご嗣^しも^もと^とめ^めら^らる^る、^の井^いと^と
 の^の誠^{せい}心^{しん}を^をや^や感^{かん}應^{おう}は^はし^し、^のい^いん^ん、^のほ^ほど^ども^もお^おの^の五^ご更^{ぜい}よ^よら^らう^うば^ばき^き、^の市^し戸^こ
 帳^{ちやう}の^のれ^れと^とい^いら^らけ^け、^の菩^ぼ薩^{さつ}出^{しゅつ}現^{げん}は^は、^の柔^{じゆう}和^わ端^{たん}嚴^{げん}か^かる^る尊^{そん}容^{じやう}あ^あら^らう^うと^と
 た^たが^がま^まの^の臆^{おそ}、^の玉^{ぎよく}音^{おん}を^を発^{はつ}して^て曰^{いは}く^く、^の汝^{にょ}等^{たう}が^が頼^{らい}む^むる^る知^ちいと^とせ^せら^らなる^る
 ゆ^ゆく^く、^のふ^ふろ^ろく^くの^の孤^こ獨^{どく}と^と悔^{かい}と^と今^{いま}し^しも^も望^{ぼう}と^とう^うへ^へ持^{もち}こ^こる^るか^かと^と、^の一^{いつ}采^{さい}木^{ぼく}の^の
 牡^ぶ丹^{たん}花^{はな}と^と市^し戸^この^のい^いぢ^ぢう^う興^{きやう}揚^{やう}り^りま^ま、^の竹^{ちやく}川^{せん}忙^{まう}て^てお^お、^の戴^{たい}き^きあ^あん^んて^てあ
 ま^まは^は、^の豎^{じゆん}簾^{れん}、^の常^{じやう}名^なた^たか^かる^るふ^ふぞ^ぞ、^のい^いぢ^ぢう^う、^の歎^{たん}、^の踊^う躍^{やく}、^の耐^{たい}ど^どして^て良^{らう}人^{にん}
 頼^{らい}母^ぼと^と共^こ小^{せう}こ^こふ^ふか^かく^く、^の除^{じゆ}脱^{だつ}して^て厭^{えん}ぢ^ぢり^りし^しが^が、^のう^うり^りか^か、^の一^{いつ}陣^{ちん}の^の山^{さん}風^{ふう}吹^ふ起^きり
 草^{そう}木^{ぼく}震^{しん}動^{どう}、^のに^に起^きり^り、^の醒^{せい}来^{らい}ま^ま、^の正^{せい}よ^よら^らぬ^ぬ南^{なん}柯^かの^の一^{いつ}夢^む、^のう^うら^ら、^のい^いぢ^ぢう^うと^と

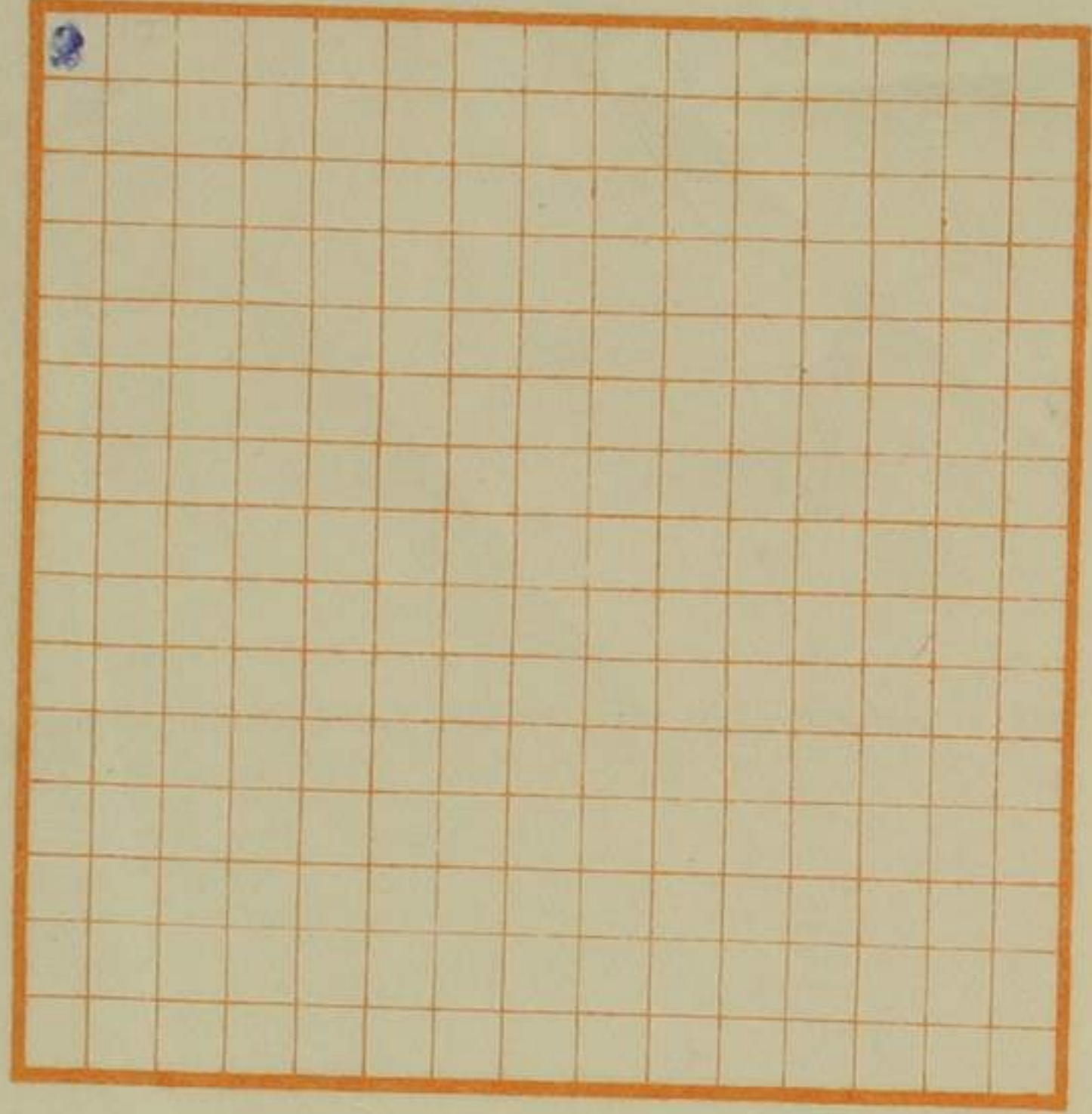
餘香馥郁にして鼻と撲衣と襲ふれり竹川唯ふらぬ牙とあり。
 月後て遂に二女子が産登時しまく香氣産室よえ満せしと
 ふん。昔在宋の大祖皇帝ハ甲馬堂中又臨凡とすけ異香
 薫世「奇穠ある小なり香孩児と呼ぶ世例もあり。これハ賤し
 妓女ふもども。娼も才藝後衛と。畑花城中ハ今吉野一人あり
 と称せりしぬるも。ひる名花の奇特よりうろさればかの憂想の心
 と天香の濃うふる小表て。花濃とい名にけしふるべしとて
 みの死濃後末由りて。一亡ハのふ小房吉野てハ形顔と
 なまつた。かく命落して。浮川竹の苦界に沈めぬまど。意中
 錦五郎がぬ。幾十の艱昔瓜志の。節操を氷霜うりも索は。
 露うりも撓とふりしが。不口極泰至して。後ハ佐野昭益と身

價と償ハも遂に從良の望も瓜遂夫婦團圓懐び順かひけま
 中々宋ゆとるとかん。但錦五郎とハ蝶と助が改し名して晩年
 税髪入道して昭益と号せり。昭益と吉野ハ同年なりとい傳は
 ある好奇家ハ昭益と吉野と夫婦が歳と且ハ兩吟世連歌の
 懐紙を珍視せり。こふと有報とものあり。又吉野が秘蔵せ
 中山の色紙吉野川の裂きん。佐野の家ハ傳つるは。且
 吉野窓といふともありしとぞ。世ハ茶入の袋ハ珍重せる吉野
 間島とハ東西ハ那の吉野ハ龍衣穿よせし吉野川の縞の類裂
 ろうといふ。もとよりこの吉野ハ吹彈歌舞の伎倆ハ冠絶し
 のこたらず。茶香連徒の風流もその名高うるはうぐあり。し
 しも吉野が媿娜たる。標致の月のとく花のとくふるに似氣

かくもかこのどく老實かうじつから縹まのうい龍襲りゆうじやくせいハその好このじところの
 高尚かうかうさ推おくろうてまるきぬまる。罪つみかくてうとも山やま東あづまやまの肩。
 とくハ発はつハ吉きち塾じゆくが口くち占ちたるはいひのぢぢる人ひとあり。されと大おほ鏡かがみ
 色いろ競せ馬うまかどふ扱あて考あらうよ。初はつ代だい吉きち塾じゆくハそのむむじじ都みやこ六む條じょう柳りゆう
 埒らはら妓ぎ院いんありし時ときのたた魁けいなりと云いく。又また旧きゆう記きを按あじるふ西せい島しま
 ハ吉きち野のが没ぼつせし十年じゆんねんののち後ごハ旧きゆうののち花はな街まちハ朱あか雀すず野の小こ移うつされて
 成なり給たまととんえたり。あつつつハ時とき代だいままくくああハハ極ごくりて是これ初はつ
 代だい吉きち塾じゆくハありさると彰あけし。島しま原はらの妓ぎ院いん中ちゆう林りん豊ゆほう前ぜんが秀しゆ林りん弥や
 二代にだい吉きち塾じゆくとふると記きせし書かりらハ是これ等らが吟ぎんせしとのつああハ
 他たの妓ぎが作さくて来き入いるう句く集しゆふもああかり。又また吉きち塾じゆくハこれ載のり
 て曲まが編へんと出でよいハのほつとら句くあり。その事こと實じつハ次すゝ編へんハこれ

こてままとと佐さ野の昭しやう益えきが教しやく奇きよよななたたううとといい番ばんくく世せのおららととろ
 なる。よろづの風ふう流りゆう伎ぎよよむむづづとといいららぬぬととももあありりししががここて
 和わ歌か蹴そ鞠くハ中ちゆうより秀しゆて名なみみふふりりととぞ昭しやう益えき自じ作さくの賑にぎ草そう
 ととりり書かハ其その事こと多たくくああるるす。昭しやう益えきハその才さい豪ごう富ふの家いへハこれ
 かり。ここらら佐さ野のままととる。聖せい代だいハ遇うここしし故こ自じ己ぎ生せい涯えいハこれええじじ。
 ややせせしし盛せい事じととののかかささののここししたたままハハ双さうのの固このの法はふ師しハこれれ
 る世よハハしてしてははららふふしたしたるる流りゆう然ぜん草そうハハ様やうららりり縁えんととすすて
 泰たい平へいのの氣き象しやうハハののづづらら具ぐりり。振ふるハハるる世せののささハハ章しやう句くのの表あははは
 物ものあり。國くに朝あさハハてて近ちゆう来きゆう隨ずい筆へつのの書しよ影えいらら中ちゆうハハ紹しやう羣ぐんててその
 文ぶんハハ醇じゆん美みハハ優ゆう姚やうハハれれどどそののささままとと世せハハ多たくくすす。ここてて初はつ編へん
 ハ半はんららりりとと昭しやう益えきハハとと演えん次じ編へん半はんららりりハ吉きち塾じゆくハハとと説せつ出です

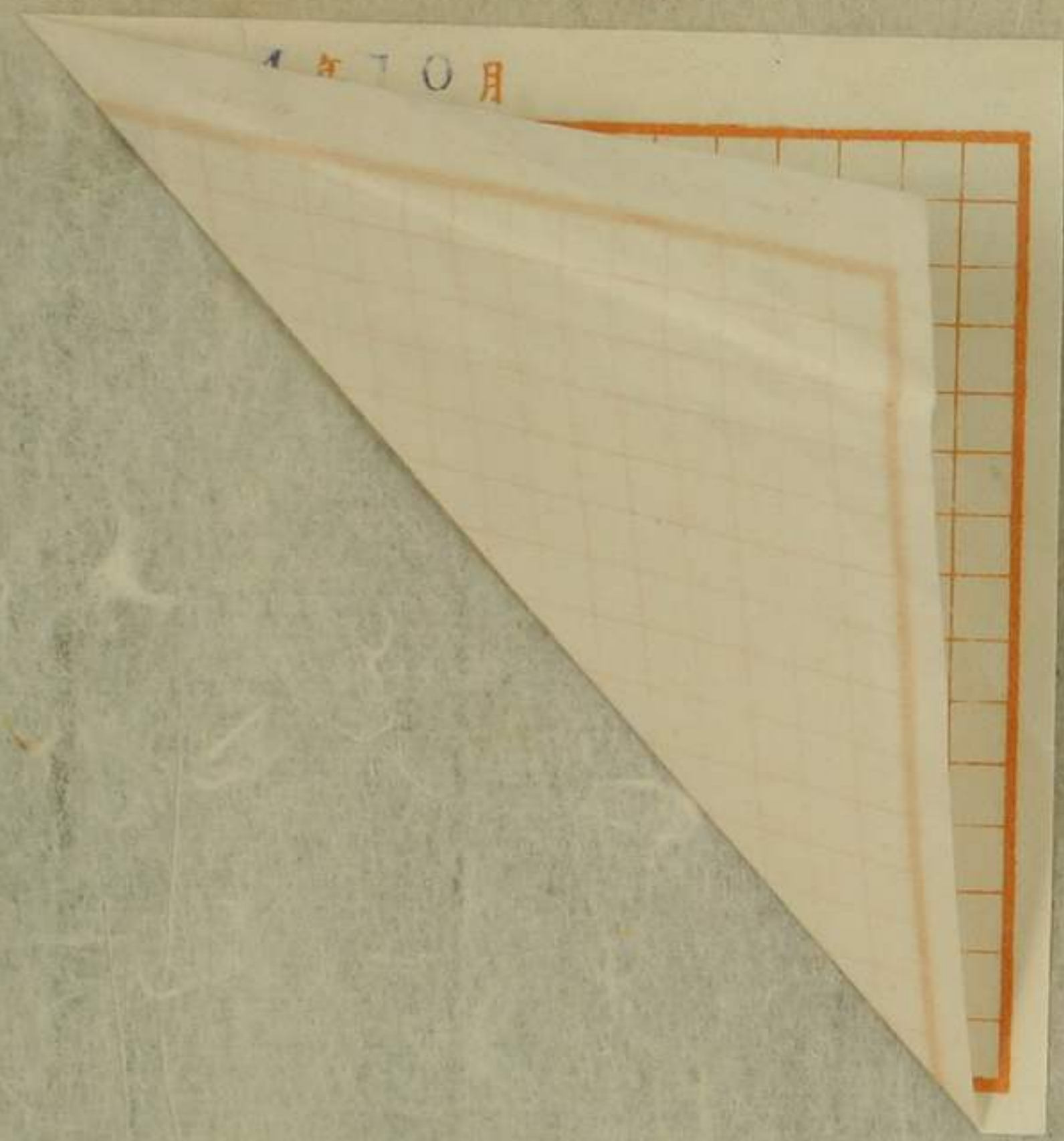
4年10月



着官その発免を待て一境あり

袖に
四月に以て急香浦史二
控





肴宮その発免を待て一境あり



和
月
以
急
香
浦
史
二
條

